

30 年前の思い出

寺 出 浩 司

実践女子大学短期大学部 名誉教授
(2017 年 3 月 31 日 英語コミュニケーション学科 退職)

私が、実践女子短大で専任教員として働きはじめたのは、いまからちょうど 30 年前、1990 (平成 2) 年のことだった。

最初に所属したのは、生活文化学科生活文化専攻 A 系という長たらしい名前の組織であった。当時の短大は、国文・英文・生活文化の 3 つの学科でできていた。国文は現在の日本語コミュニケーション学科、そして英文は英語コミュニケーション学科の前身で、その歴史は今の短大の中にもしっかりと受けつがれている。これに対して私が所属することになった生活文化学科は、とても残念なことだが、いまの短大から完全に姿を消してしまっている。この機会に、そこにかつて在籍した者として、この学科のことを少しだけ紹介しておきたい。

生活文化学科には生活文化専攻と食物栄養専攻の 2 専攻があり、前者の生活文化専攻には“生活・社会・文化”を総合的に学習する教養色の強い A 系と、被服のことを勉強する B 系が置かれていた。3 つの独立したカリキュラムをもった大きな学科だったのだ。このうち食物栄養専攻は、短大の渋谷移転時に、日野に残った生活科学部食生活科学健康栄養専攻に吸収されるという形で学園の中に生き残っていった。これに対して、生活文化専攻はまず B 系が 90 年代の終りに募集停止、残った A 系は 2000 年の短大の改編で生活福祉学科へと改組され、一時は健闘するものの次第に入学者は減少し、12 年に最後の卒業生を送り出して幕を閉じることになった。そのような意味では、私が最初に所属した生活文化専攻という組織は、90 年代の後半からはじまった短大の苦闘の時代をまさしく象徴的に体現した組織であったと言ってよい。試みに短大在籍中の私の所属組織名を順にあげていくと、生活文化学科生活文化専攻 A 系→生活文化学科生活文化専攻→生活福祉学科→短期大学部教育研究センター→英語コミュニケーション学科というようになる。短期間のうちに組織改編と移籍とが繰り返されるこの履歴の中にも、生活文化学科とそこに所属した教員たちの苦闘の足跡を見ることができるだろう。

暗い話題はここらで止めよう。勤めはじめの数期間は、A 系は、併設高校からのかなりの数の入学者を含めて一学年でおおよそ 200 名近くの入学者を確保し、元気一杯だった。短大全体でみても 3 学科あわせての入学者は 800 人を超えており、四大の入学者を上回る年もあるという実績を誇っていた。そのことに対応して、私がこの短大に来た頃は、いろんな所で施設拡充・整備の建築の音が盛んに鳴り響いていた。『学園史』を調べてみても、89 年・短期大学第 2 館増築工事竣工、90 年・短期大学本館、学生ホール増築工事竣工、短期大学図書館増改築工事完成という記録がある。私が勤めはじめた頃は、まだまだ短大全体が元気一杯で、右肩上りの成長がまだ

まだ続くという期待にみちあふれた時代だったという印象が強い。

その短大の元気さは、たとえば「輝陽祭」「短大運動会」「校外研修」などの短大独自のイベントにもよくあらわれていた。それらのイベントのいくつかを実際に経験して、なんてお祭りの多い学校なのだろうかと、そして祭りに参加する学生たちがなんて元気にあふれているのかと驚いた記憶がある。これらのイベントは、短大の日野移転（1976 年）とともに始まったものであり、四大とは別の独立した神明校地に、多い時には 2 千人近くの在學生を集めた短大の強烈な自己主張のあらわれであったように思われる。「輝陽祭」の風景、「短大運動会」の風景、そして「校外研修」の風景が、それに参加した学生たちの元気な姿とともに、私の思い出の中に深く刻みこまれている。それは私にとって短大時代のとても良い思い出のひとつになっている。